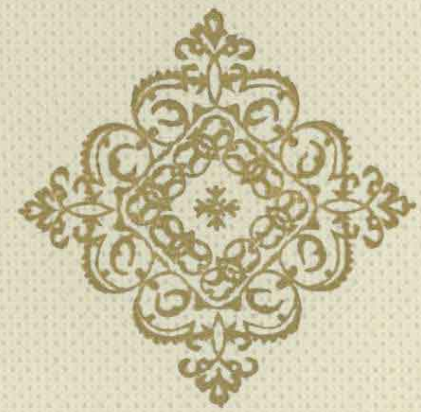

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

27

へ

郷愁　神品芳夫訳
クヌルプ　森川俊夫訳
シッダルタ　手塚富雄訳
荒野の狼　辻　瑆訳

中央公論社

新集 世界の文学 27 ©1968

ヘッセ

訳者 神品芳夫
森川俊夫
手塚富雄
辻 瑆

昭和43年8月1日初版印刷
昭和43年8月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

郷愁　3
クヌルプ　141
シッダルタ　217
荒野の狼　319
解説　524
年譜　542

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鄉

愁

第一章

はじめには神話があった。偉大な神さまはインド人の心に、ギリシア人やゲルマンの人々の心に、さまざまな物語を書きつけながら、たえず表現を求めて努力されていたのであるが、それとおなじように、ひとりひとりの子供の心のなかにも、神さまは毎日神話を書きつけておられたのである。

自分の故郷の湖や山や小川がなんという名前であるのかは、わたしはまだ知らなかった。けれども、青みがかった緑色のなめらかな湖の水面が、細かい光線に織りなされた陽の光のなかで横たわっているのをわたしは見ていた。さらにまた、その湖をぎっしりと囲んでいる険しい山々や、その頂近い山襞に青白く輝く雪渓や、小さな滝を見、そしてふもとの明るい斜面の牧草地にいろいろな果樹や小屋や灰色の乳牛などのいる景色を見ていた。ところがわたしの小さな貧しい魂はからっぽで、物言わず、受身一方なので、湖や山の精霊たちはいい気になって、自分たちの勇壮な武勇伝をわたしのおさない魂に書きつけるのであった。そそりたつ絶壁の山肌は、自分たちの生まれた大昔の時代のことを、自分たちのからだのあちこちにある傷跡の由来などを、どうだといわぬばかりに、威厳をつけて物語ったものだ。いならぶ断崖は、地球が破裂して、ひんまがり、痛めつけられたからだから陣痛のうめき声をたてながら、山々の頂や尾根を生み出していったころのことを語っていた。岩山がうなりを生じ、割れるような音をたてて噴き出しては、どうしようもなくなってくずれてしまう。双子の山が生まれると、一つ分しかない場所を激しくうばいあい、ついには一方が勝ってその地を制し、兄弟の山をわきへ放り出し、こわしてしまう。今でもなお、山の峡谷などには、その時代のものとみられるこわれた山頂の岩塊や裂けた岩がくずれかかっていた。雪解けの季節になると、恐ろしい水の勢いが家ほどもある大きな岩塊を押し流し、ガラスのように打ち砕き、猛烈な体当たりで突きこわして、柔らかな牧草地へ放り出すのであった。

この岩山たちの語るのはいつもおなじ物語であった。この物語を理解するのは易しいことだった。岩山の険しい壁を見さえすればよい。その絶壁はいくつもの地層が重なりあってできており、しかもそれが入り組みあい、破損していて、どの岩壁にも鋭い裂傷がいっぱいあるの

だ。「わしらは恐ろしい目にあったのだよ」と岩山たちは言うのであった、「そして今でも傷はなおっていないのだ」と。そう言いながらも岩山たちの態度は誇らしげで、表情はきびしく、百戦錬磨の老兵士のようにきりっとしていた。

たしかに、岩山たちは兵士であった。わたしは彼らが戦うのを見た。風雲急を告げる早春の夜、いきりたったフェーン（早春に南からくる季節風）が岩山の頭上でうなり声をあげ、岩壁の脇腹があちこちでやぶれて、そこから清らかな滝が落ちるとき、どの岩壁も荒れ狂う水の大軍と格闘するのである。こんな夜には、岩山たちは反抗的に根をふんばって立ちはだかり、まっ暗ななかで息もつかずに、歯をくいしばってがんばり、砕けた岩壁や槍のような鋭い岩をあらしに向かって突き出し、あらんかぎりの力を集めて突っ張っていた。傷を受けるたびに、岩山たちは怒りと恐れのまじるどよめきの声をあげた。そしてそのすさまじい苦しみの声は、きれぎれに、怒りをこめて、ずっと遠くの谷にまでこだました。

さらにわたしは、牧草地や山の斜面を見、野の草花やしだや苔の類におおわれた岩の裂け目の土の部分を見た。昔からの土地の言葉は、これらの植物に風変わりな意味深長な名前を与えていた。山々の生んだ子供であり孫であるこの草花たちは、それぞれ自分の場所で色彩をきそって、おとなしく生きていた。わたしは草花たちの心を感じとり、観察し、香りをかぎ、名前をおぼえた。草花よりももっと深くわたしの心に触れたのは樹木のたたずまいであった。どの木も孤立した生活をおくっているのを、わたしは見た。どの木もめいめい自分の枝ぶりと梢をつくり、固有の影を映していた。木はみんな隠遁者であると同時に戦士であって、その点で山そのものに似かよっているように思われた。なぜかといえば、どの木も、ことに山の上のほうにある木はなおのこと、滅びてしまわないために、いや成長していくために、風やあらしや岩石を相手にして、静かな辛抱づよい戦いを演じていたからである。どの木も自分の荷物をもたねばならず、しがみつかなければならなかった。それによって個々の木の形がすべて違うということ、それぞれ独特の傷をもつということが生じてきたのである。松のなかには、あらしのせいで木の一方の側にしか枝のない木もあるし、赤い幹が突き出た岩に蛇のようにからみついて、岩と押しあいつかみあっている木もあった。木々は、戦闘好きの男たちのようにわたしを見すえ、わたしの心のなかに恐怖と敬意を呼び起こした。

わが故郷の男や女たちもこれらの木に似ていて、頑丈できりっとしたからだつきをしていて、無口であった。すぐれた人ほど無口なのであった。だからわたしは、木

木や岩とおなじように人間たちをも眺め、人々についていろいろ考え、物静かな松とおなじように人々に対しても愛をもつことをおぼえた。

わたしたちのニミコン村は、突き出した二つの山のあいだにはさまれた湖水のほとりの三角形の斜面の土地にある。一つの道が近くの僧院に通じ、その次の道が徒歩で四時間半の道のりにある隣の町に通じていた。湖のほとりにならぶほかの村には水路を利用して行くほかなかった。わたしたちの村の家々は古い木造で、年齢ははっきりしていなかった。新築の家というものはほとんどつくらず、古い家を必要に応じて少しずつ修理してゆくだけである。今年は廊下を修繕して、次の機会には屋根を少し、というぐあいにである。そうすると、以前には部屋の壁の一部分であった梁や木摺が今では屋根の飾りに用いられていたりするのである。そういうふうに転用する場所がなく、しかし薪にするにはまだもったいないという角材は、その次に家畜小屋か乾草貯蔵小屋の床を修理するときまでとっておく。あるいは、家の入口の横棒として利用することもできよう。おなじような運命が、そこに住んでいる人たちをも支配している。どの人間も、可能なかぎり自分の役割を演じ、それからだんだんに役に立たぬ人間の仲間に入れられ、そしてついには、だれにも顧みられないままに暗やみのなかへ沈んでいってしまうのである。長年外国で暮らしたのちにわたしたちの村に帰ってくる人は、なにも変わっていないと感ずる。せいぜい、いくつかの古い屋根が新しくなり、新しかった屋根が古くなっているぐらいのものだ。昔いた老人たちはもういなくなってしまっているけれども、ほかの老人たちがおなじ小屋に住みついて、おなじ名前をもち、髪の毛の黒ずんだ子供たちの番をしているのだ。顔や身振りを見ていたのでは、この人たちはすでに死んだ先人たちの生前の姿とほとんど区別をつけることができない。

わたしたちの村には新しい血液と生命をよその土地から導入するルートがなかった。村の住民はかなり頑健な血統をもった人たちではあるが、ほとんど全員がなんらかの形で親戚関係にあり、全住民の四分の三がカーメンチントの姓をもっている。カーメンチントの名は教会の記録簿のすべてのページを支配し、墓地の十字架の大部分を占領している。家の戸口には、油絵具か荒っぽい木彫りでこの名前が記されており、運送屋の馬車にも家畜の飼葉桶にも湖上の船にもこの名が読まれる。わたしの父の家の入口にも次のように書かれてあった。「ヨーストとフランチスカ・カーメンチント、この家を建つ」と。ところがこれはわたしの父ではなく父の曽祖父なのである。もしわたしが子供を残さずに死んだ場合には、この古い巣に別のカーメンチントが住みこむことは明らかで

ある。もちろんそれまでこの家が健在で、屋根もちゃんとしていればの話であるが。

見たところなんの変哲もない人たちのようではあるが、この村の住民のなかにも悪人と善人がおり、家柄のよいのと悪いのがあり、強者と弱者がいる。頭のよいのもたくさんいるかわりに、一群の愚か者もおり、それとは別に精神薄弱者もいる。どこの集落でもおなじように、この村もまた大きな世界の小さな縮図であった。なにしろ大人物と小人物、利口者と間抜けとが親戚関係で結ばれているために、いかめしい気位の高さと救いがたい低俗さが、一つの屋根の下でひしめき合うという様相を呈した。そのおかげでわたしたちの村の生活は人間のもつ深みとこっけいを同時に呈示する格好の場所となったのである。ただ、これらすべての人たちのうえに、だれにも見えず、だれにもはっきり意識されていない異様な重苦しいヴェールがいつもかかっていた。というのは、この土地ではすべてが自然の意志次第であり、人間の努力が実る領分がたいへん狭いので、長い年月のあいだにだんだんと、この村の人たちのような老いゆく種族には、憂鬱の感情が生活のなかにしみこんでしまっていたのである。この憂鬱の感情はここの人々の鋭く険しい顔つきに不似合いではなかったけれども、それ以上にはなんらの実りももたらすものではなかった。少なくとも、なんら喜ばしい実りを生むものではなかった。まさにそれだからこそ、幾人かの道化者がいて、彼らが村人にとってなくてはならない気晴らしの材料になっていた。この道化者たちも、もともとは静かなまじめな人物だったが、笑いやからかいを引き出すような雰囲気ときっかけをもちこむ術を心得ていた。この人たちのうちの一人がなにかまた仕出かして、その話をすると、ニミコン村の人々のしわのある茶色の顔に陽気な光がひらめくのだった。こっけいなことをおもしろがることに加えて、自分はそんなばかなことはしないぞという満足感による、パリサイ人ふうの優越感をもちょっぴり味わった。正義の人間と罪ある人間の中間に身を置いて、正義と罪悪の両方から好ましいものはなんでも喜んで受けとろうというのが村の多くの人たちの生き方であり、わたしの父もやはりそういうタイプの人間だった。他人のとんまぶりを聞くと、父はうれしくてじっとしていられなくなった。そんなとき父は、事を起こした人に同情してみたり、自分はその点非の打ちどころがないというおごった気持になったり、この二つの極をこっけいなほど行ったり来たりするのだった。

笑い者になるほうに属していたのがコンラートおじさんだった。だからといってしかし、このおじさんがわたしの父やそのほかの男たちにくらべて頭が悪かったとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うのではけっしてないのである。おそらくコンラートおじさんはなかなかの知恵者で、次から次へとアイデアを生みだす力をそなえていたのであって、それは他人の羨望の的になってもよいほどのものだった。しかし、どのアイデアも生かしきることができなかった。それでもおじさんはがっくりしたり、なんらなすところなく沈みこんでしまったりすることなく、飽くことなく新しいことをはじめ、自分自身の創意工夫の妙味を楽しんでいるようなところもあった。これはたしかに彼の長所であったが、これがこっけいな奇行と思われ、無料で見物できる村の道化役という烙印をおされた原因でもある。コンラートおじさんに対する父の態度も、感嘆と軽侮のあいだをゆききしていた。父の義兄であるコンラートおじさんが新しい考案を示すたびに、父は強い好奇心にとらえられ、興奮しきっていた。ねらいすまして皮肉な質問をしたり、あてこすりを言ったりして、父はその好奇心や興奮をごまかそうとするのだが、それはうまくいかなかった。コンラートおじさんが、こんどこそ成功疑いなしと思い、派手に宣伝をはじめると、父もそのたびに夢中になって、さすがはわが兄というような言い方で将来をあてこんでこの天才に調子を合わせるのだが、あげくのはてにやっぱり失敗がやってきて、おじさんが肩をすくめると、父は腹をたててこの義兄にあざけりとののしりの言葉をあびせかけ、数ヵ月というもの見向きもしなければ、言葉もかけないということになるのだった。

わたしたちの村の人々にヨットをはじめて見せてくれたのもコンラートおじさんである。それには、わたしの父の舟が動員されることになった。帆や帆綱などはカレンダーにあった木版画を手本にしておじさんがきれいに仕上げた。結局ヨットにするにはうちの舟は幅がたりなかったのであるが、それもおじさんの責任ではなかった。準備は数週間かかり、父は緊張と希望と不安のあまり水銀のように落ち着きを失っていた。ほかの村人たちの話題もコンラート・カーメンチントの新しいもくろみでもちきりだった。夏も終わりに近いころの風のある朝にこの舟がはじめて湖水に進水することになったが、これはわたしたちにとって記念すべき日となった。父は起こるかもしれない大失敗をおそれて、遠く離れたところに陣取った。ましてや、この舟に同乗したいというわたしの希望をあくまで認めようとせず、わたしを大いに悲しませた。結局パン屋フュースリの息子だけがこのヨット製作者のお伴をすることになった。しかし見物は村じゅう総出で、みんな砂利を敷いた広場や庭園にたたずんで、前代未聞の光景を目撃しようとしていた。沖の方向へかなり強い東風が吹いていた。舟が風に乗るまで、パン屋の息子が舟を漕がなければならなかったが、やがて帆が

風をはらむと、舟は誇らしげに走りだした。わたしたちは舟がすぐ近くにある岬をまわって消えてゆくのを讃嘆の気持をもって見送った。そしてこの頭のよいおじさんが帰ってきたら勝利者として歓迎し、からかい半分で彼の仕事を見ていたことを恥じねばならぬと心に言いきかせた。ところが夜になってこのヨットが帰ってきたのを見ると、帆は影も形もなく、乗組員は半死半生のていであった。パン屋の息子は咳をしながら言った、「あんたたち、大きな楽しみをふいにしちまったぜ。もう少しのところでな、この日曜には葬式のごちそうに二人前ありつけるところだったからな」父は舟を修復するのに新しい舟板を二枚もつぎこまねばならなかった。それ以来というもの、二度とふたたびこの青い湖面に帆の影が映ることはなかったのである。このことがあってからかなりのあいだ、コンラートおじさんがなにか急いでいるときには、いつも後ろから声がかかった、「そら、帆をあげるんだ、コンラート」と。父は怒りを押し殺していた。ずっと長いあいだ、このあわれな義兄に出会うたび、横を向いて、大きな弧を描くほど派手に唾を吐いた。これは口では言えないほどの軽蔑の気持をあらわすものだった。こういう状態がずいぶん長くつづいたが、ついにある日のことまたしてもコンラートおじさんは、こんどは耐火性のパン焼きがまの考案図をもって、父のところへ面会を求めてきた。ところがこの新案が発明者にかぎりない嘲笑を負わせる結果になり、わたしの父に現金四ターレルの損害を与えることになったのである。この四ターレルの話を父に思い出させることは絶対に禁物だった。ずっとのちになってから、わが家がまたもかねに困っていたとき、母がなにかのはずみで言ったものだ、「あの失敗で消えちまったおかねがあったらよかったのにねえ」と。そうしたら父は首までまっ赤になったが、やっとのことで自分を抑制して、ただこれだけ言った。「あんなはしたがね、あったところで日曜一日の酒代にしてしまうつもりだったんだ」

いつも冬の終わりになると、フェーンが底深いうなりをたててやってきた。それを聞くとアルプスの人間は恐れと身ぶるいを感じ、他国に行っている人は身をひきちぎられるような郷愁にかられながら、その轟音を思い出すのである。

フェーンが近づいてくると、何時間も前にもう、男も女も、山も、野生の動物も、家畜も、みんなその気配を感じとる。まず急に北から冷たい風が吹いて、それからまもなく暖かな深いざわめきが起こり、フェーンの到来を告げるのだ。青みがかった緑の湖面がまたたくうちに墨を流したようにまっ黒になり、たちまちせわしそうに白い波頭をたてはじめる。それからまもなく、ほんの数

分前まで音もなく平和に身を横たえていた湖が、まるで海のように、激しい波しぶきをあげて岸辺にぶつかってくる。それと同時に、あたりの風景がみんなおびえて身を寄せ合う。ふだんははるか遠くのほうにかすんで見える山の頂が、そのときは岩の数まではっきりわかる。ふだんは遠方に紫色の斑点のようにしか見えない村も、そのときには屋根や破風や窓が一つ一つはっきり見分けられるようになる。山も牧草地も家々も、あらゆるものが、臆病な家畜のように身を寄せ合う。それからいよいよ、雷のような轟音と大地の震動がはじまる。鞭打たれて舞いあがる波のしぶきは、煙のように空中にひろがる。そしてひっきりなし、とくに夜などには、あらしと山とが繰りひろげる死闘の様子が手にとるように聞こえてくる。しばらくすると、小川が土砂で埋まった、家がつぶれた、舟がこわれた、父が、兄弟が行方不明になった、というような情報がぞくぞくと伝わってくるのである。

子供のころ、わたしはフェーンがこわかったばかりか、憎んでさえいた。ところが腕白な年ごろになるにつれて、フェーンが好きになった。フェーンのもつ永遠の若さ、その好戦的でわがまま勝手なところ、しかもそれが結局は春を運んできてくれる使者であるというところなどが気に入ったのである。フェーンが生命と希望をみなぎらせて粗暴な戦いをはじめて、たけり、笑い、うめき、峡谷をほえながら走りぬけ、山の雪を食い荒らし、しんの強い松の古木を乱暴にねじまげ、苦しそうなうめき声をたてさせるのは、まことにめざましい光景であった。後年になると、フェーンを愛するわたしの気持はいっそう深まった。フェーンの実体は甘くうるわしい豊かな南国なのだということを知ったからである。つまり、来襲する南国を歓迎しようという気持になったのである。事実、フェーンは南国の暖かく美しい歓喜の川から立ちのぼって発生し、それが北上して山にぶつかって荒れくるい、平坦なアルプスの北側の冷たい空気に触れて疲れはて、やがて死に絶えるのである。もう一つ世にもふしぎな、また貴重な現象は、あの甘美なフェーン熱である。フェーン到来の季節になると、アルプス地方の人々、とくに女の人はこの熱に襲われて、不眠症になり、ひどく神経過敏になるのである。反応の遅い、貧相な北国の人の胸に激しく燃えるからだをぶつけてくるのがこの南風である。雪に閉ざされたアルプスの村の人々に、山ひとつ越えた向こうの湖のほとりにはもう桜草や水仙やアーモンドが咲いていますよと告げ知らせてくれるのが、この南から訪れるあらしなのである。

フェーンが吹き終わり、最後のきたない雪崩がくずれ落ちると、一年でいちばんすばらしい季節がやってくる。山の上をめがけて、四方八方から、黄色の花むしろがだ

んだんに這いあがっていくのである。さらにその上のほうには、雪の山のつらなりと氷河が厳然と、その近づきがたい姿を誇っている。湖は青く、水はぬるみ、太陽と流れる雲をその面に映すようになる。

こういうことすべては、おさない日々を満たし、場合によっては一人の人間の生涯全体を満たす。なぜなら、これらすべては、人の口の端にはけっしてのぼることのない神の言葉をはっきりと、堂々と語るからである。この言葉を幼年時代に聞いたことのある人には、それは一生涯、甘美に、力強く、威嚇的に耳に響いていて、その呪縛からのがれることができない。山をふるさととする者でも、長い年月にわたって哲学や博物誌を研究するあまり、主なる神さまの存在をないがしろにすることもあろうが、――そういう人もひとたびフェーンの到来を感じとり、雪崩が森のなかをつらぬき走るのを聞くと、深く感動に胸をふるわせて、神を思い、死を思うようになる。

父の小さな家に境を接して、垣をめぐらした狭い庭があった。そこには渋みのあるサラダ菜や、蕪や、キャベツが作られていた。そのうえ母が草花のためにごくささやかな花壇もこしらえていた。そこにはばらが二株、ダリアが数本、木犀草がひと群れ、片隅の幸福を願うようにひっそりと咲いていた。その庭につづいて、もっと小さな、砂利を敷いた空地があり、それが湖のほとりにつながっていた。そこには破損したおけが二個、それに板や杭がいくつか置かれていた。下の湖水にはわたしたちの小舟がつないであった。この小舟は何年かごとに修繕し、塗料を塗りかえねばならなかった。そういう仕事のおこなわれる日のことを、わたしははっきり記憶している。それは暖かい初夏の午後にきまっていた。庭のなかを硫黄色の蝶が陽を浴びながら、よろめくように飛んでいた。湖の水面は油を流したようになめらかだった。青く、静かに、光線を細かく反射させていた。山の頂はうすもやに包まれていた。そんな背景のなかで、この砂利を敷いた空地にはタールとペンキのにおいが鼻をついていた。塗装された小舟は、その夏じゅう、タールのにおいがしていた。何年ものちになって、どこかの浜辺で、水のにおいとタールの臭気の混ざり合ったにおいがわたしの嗅覚を襲うたびに、あの水辺の空地のことが眼前に浮かんできて、腕まくりをして刷毛をふるう父の姿や、父のパイプから流れ出て静かな夏空へのぼる青みがかった煙や、黄色い蝶のおずおずと飛ぶさまが見えてくるのだった。そういう日には父は異常なほどの上機嫌で、得意のトリルを口笛で吹いてみたりした。場合によっては、短いヨーデルを、低い声でではあるが、うたうこともあった。そんなとき母は晩のために何かごちそうを作るの

だった。今考えてみると、母が料理に腕をふるったのは、夫のカーメンチントが今晩こそは居酒屋へ出かけないでほしいというひそかな願いのためだった。だが、彼はやっぱり出かけていった。

この両親がわたしの情操の発展をかくべつ促したとも、また妨げたとも思えない。母はいつも山のような仕事をかかえていたし、父はこの世のもののなかで教育問題ほど関心のもてないものはないというような人間だった。わずかな数の果樹の手入れをしたり、じゃがいも畑を耕したり、乾草の様子を見たり、父も仕事には事欠かなかった。しかし数週間おきに父は夕方出かける前に、わたしの手をとって、だまったままわたしを連れて、家畜小屋の上にある乾草置場へ入っていくのだった。それから、そこで、奇妙な懲罰と贖罪の儀式がおこなわれた。わたしはしたたかぶたれるのだが、なんのための罰なのかは、父にもわたしにもよくわからなかった。それは、運命の女神メネーシスの祭壇にささげる静かな生贄であった。父がのしるのでもなく、わたしが泣き叫ぶのでもなく、ある神秘的な力に対してささげる贈り物としておこなわれるのであった。わたしはのちになって、「盲目なる」運命というようなことを耳にするたびに、いつもこの神秘的な場面のことを思い出し、あの場面はこの言葉を明確な形に表わしたものであるように感じた。わたしの善良な父親は、みずからそれと知らずして、人生がわれわれにつねに課している単純な教育法を採用したのだ。つまり、天気のよい日にまじえてときどき雷雨をもたらし、それによってわれわれに、日ごろどんな罪業を犯して神に挑むような不埒なことをしているかをゆっくり反省させようというものである。残念ながら反省ということはわたしの場合は全く、あるいはめったに起こらなかった。むしろあの折檻を、望ましい試練と思わないまでも、とにかく平然と、あるいは反抗的な気持で甘受し、そういう晩には、これで処罰が終わってふたたび数週間は自由の身になれると喜んだものである。しかしわたしに仕事を覚えさせようという父のこころみに対しては、わたしははるかにはっきりと我を張って突っぱねた。不可解な浪費を事とする自然は、わたしのなかに二つの矛盾する要素を授け、結びつけたのだ。その一つは並みはずれたたくましいからだ、そしてもう一つはこれも尋常でない仕事ぎらいという性質である。父はいろいろと苦心してわたしを役に立つ倅に、仕事のうえの相棒に仕立てあげようとしたのだが、わたしは仕事をおしつけられると、仕方なくそれだけはいやいやながら片づけるというありさまだった。高校生当時のわたしにとって、古代ギリシアの神々のなかで、あの有名なつらい労働を強制されたヘラクレスの身の上ほど同情を感じさせるものはなかっ

た。さしあたってわたしには、岩地や牧草地や水辺をただ漫然とさまよい歩いているときほどすばらしいときはなかったのである。

山と湖と、あらしと太陽、それらがわたしの友だちだった。こういう自然がわたしに話を聞かせてくれ、わたしを教育してくれたので、それは長いあいだ、どんな人間や人間の運命よりもなつかしく、親しいものだった。しかし照り輝く湖よりも、陰惨なフェーンよりも、陽の照りつける岩よりもわたしが愛着を寄せていたのは、雲の存在だった。

この広い世のなかに、わたしよりも雲をよく知り、わたし以上に雲を愛している人がいたら、お目にかかりたい。あるいは、雲よりももっとすばらしいものがこの世にあるというのなら、お見せ願いたい。雲はたわむれであり、目のなぐさめである。雲は祝福であり、神の恵みである。雲はまた怒りであり、死の力である。雲は、生まれたばかりの乳飲み子の魂のように繊細で、柔軟で、やすらかである。雲はよき天使のように美しく、豊かで、恵みぶかい。雲は死をもたらす使者のように、陰惨で、のがれようもなく、なさけ容赦がない。雲は薄い層をなして銀色にたなびき、純白の帆を金に縁どりして走り、あるいはまた、黄に、赤に、青に色どって静かにやすらう。雲は殺人犯のように、黒ずくめのいでたちで、ゆっくりしのび寄ってくる。疾駆する御者のようにうなりをたてて頭上を走りすぎるかと思うと、沈鬱な世捨て人のように、さだかならぬ高所で悲しげに、夢みごこちにただよっていたりする。雲は神聖な島々の形をなしたり、聖なる天使の形になったり、脅かす手に似たり、はためく帆に似たり、さすらう鶴に似たりする。雲は神のおられる天と貧しい地上の中間にただよい、両方に属しながら、人間のあこがれの美しい比喩となっている。地上は自分のけがれた魂を清らかな天に寄せて清めようと願っているが、そんな地上の夢を形にあらわしているのが雲である。雲はさすらいとか、探索、願い、望郷といったものの永遠の象徴である。雲が天と地のあいだにおずおずと、あこがれつつ、反抗的にただよっているように、人間の魂も時間と永遠のあいだをおずおずと、あこがれつつ、反抗的にただよっているのである。

おお、雲よ、美しく、休みなく、ただよう雲よ。わたしはなにも知らない子供だったが、雲が好きでたまらなかった。いつも雲ばかり見ていたのだが、自分も雲とおなじようなさすらいの人生をおくることになろうとは知らなかった。そう、わたしはつねに旅に生き、どこにいても心なじまず、時間と永遠のあいだをただよっているのだ。子供のときから、雲はわたしの女友だちであり、姉妹であった。どこへ出かけてゆくにしても、わたした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com